

こうかい ひこうかい べつ  
公開・非公開の別

■ 公開  部分公開  
 非公開

## 第2回浜松市外国人市民共生審議会会議録

- 開催日時 令和2年8月18日(火) 午後3時00分から午後4時30分
- 開催場所 オンライン会議システム ZOOM
- 出席状況  
委員 アデライデ レイス (ブラジル)  
シム キュマン (韓国)  
杉野 アドリアーナ (ブラジル)  
鈴木 エバ (フィリピン)  
妹尾 圭持 (知識経験者)  
孫 玉傑 (中国)  
丹野 清人 (学識経験者)  
ファム トウイ フォン (ベトナム)  
レニ ブラエニ (インドネシア)  
事務局 国際課 課長 鈴木 三男  
国際課 課長補佐 松井 由和  
国際課 影山 侑里奈
- 傍聴者 1人 (一般: 0人、記者: 1人)
- 議事内容 (1) ZOOM会議の注意事項・前回の振り返り  
(2) 審議テーマについて  
(3) 今後の進め方について
- 会議録作成者 国際課 影山 侑里奈
- 記録の方法 発言者の要点記録  
録音の有無 有  無
- 会議記録

# 1 開会・挨拶 《国際課長挨拶》

## 2 ZOOM会議の注意事項・前回の振り返り

### 《ZOOM会議実施上の注意事項を説明》

#### 《前回会議（第1回）の振り返り》

事務局（影山）：前回の審議会では、SDGs や子どもの虐待防止、子どもの進学や就職などの社会参加、教育などに関する意見が出た。それを踏まえ、SDGs に絡めて「外国人の子どもの社会参加について」をテーマ案として事務局から挙げさせていただく。

また、外国人市民の高齢化が進んでいる現状から、「外国人市民が老後を安心して暮らすためには」をもう一つのテーマ案として挙げさせていただく。昨年度、外国人集住都市会議 群馬・静岡ブロックで外国人市民の社会保障制度の認知度などの調査を行い、医療保険は約70%、年金は約50%、介護保険は約20%の人しか認知されていないという結果となった。こうした結果も議論の参考としてほしい。

それ以外の内容についても、議論する中でご提言いただいたものをテーマとして盛り込んでいきたい。

## 4 議事

丹野委員長：外国人でも若い年代の人なら特に問題は出てこないが、年齢を重ねると、病気になりやすくなるという問題が出てくる。これは日本人も同様である。こうした問題に対して、どのようにしていったら良いかを委員の皆さんから意見を出してほしい。

また、外国人高齢者のケアを誰が担うのかという問題もある。外国人が外国人高齢者のケアをしたり、日本人が外国人高齢者のケアをしたりするなど、様々な形態があれば良いと思う。

まずは、委員の皆さんの身近にいる外国人高齢者が、どのようなことに困っているのかについて情報共有してほしい。

レニ委員：周りにいる外国人（インドネシア人）は、まだ高齢者になっていない。一番年齢が高い人で60歳ぐらい。だが、それでもこの先どうするのかという不安を抱えている。自分も今後介護が必要になったらどうしようかと考える。今のうちに考えていかないといけないテーマだと思う。

杉野委員：外国人高齢者は増えているので、今から取り組んでいくべきテーマだと思う。介護保険などで使われる行政用語は難しいので、外国人にとって理解するのが難しい。外国人でも分かるように情報を出していくことが大切。どこで何をすれば良いのか、相談窓口はどこなのか分かるようにした方がよい。課題はインフォメーションだと感じる。Webサイトやフリーペーパー等、いろいろなものを使って情報を流してもらえると良い。

ブラジル人が多数来日するようになって、約30年が経ち、当時来日したブラジル人は現在60歳

から70歳ぐらいを迎えている。そうしたブラジル人たちは、いつかブラジルに帰るつもりで来日したため、年金や医療保険などに入っていない人が多く、一人暮らしをしていることが多い。ブラジルに帰ったとしても、ブラジルにいる家族は既に亡くなっている場合もある。そうした人たちは、情報がなくて困ってしまう。また、一人暮らしをしていなくても、家庭内で高齢者に対するドメスティック・バイオレンスが起きていないか心配。

ひまわりクリニックのプロジェクトでは、医療保険に加入していない外国人や外出困難な外国人の自宅を訪問して健診している。どの国籍の外国人でも対応している。

鈴木委員：周りにいる外国人（フィリピン人）で、年齢の高い人は60歳くらい。フィリピン人は、自分が高齢になったら家族が守ってくれると考える人が多い。介護保険などの制度の資料は日本語で作られているが、もっと分かりやすい資料や多言語化した資料が必要。高齢になったら、フィリピンに帰って家族に守ってもらえば良いとだけ考えるのではなく、介護保険などの制度を知って、保険料を払っておけば、日本に住み続けても困らなくなる。

孫委員：老後をテーマにすることは良いと思う。私は一人っ子で両親が中国に住んでいるが、自分がどこにいても両親に安心して暮らしてもらいたいと考えている。今若い人もいつか高齢者になるし、子どもが留学するかもしれない。グローバル社会の中、家族がどこに住んでいても安心して暮らせるようにするために、どうすればよいのか考えていかなければならないと思う。

杉野委員：高齢者は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、長期間家にいる人が多いが、節約などのために、エアコンを使わない人もいる。熱中症になったり、一人暮らしの場合、孤独死になったりしないか心配。

また、相談窓口の通訳者が相談者のプライバシーを守らない場合がある。そうすると相談に行きづらくなる。

丹野委員長：市の方でも、一人暮らし高齢者について把握しておいた方が良いと思う。

杉野委員：一人暮らし高齢者の情報は、プライバシーの関係で一般市民は把握しづらく支援が難しい。市で把握しておくといい。

レニ委員：日本語が不自由な外国人が高齢者になると、体調が悪くなった時にどのように助けを求めれば良いのか分からなくて心配だと思う。

今若い人でも、将来年金や介護保険などが必要になってくるということを外国人自身が理解しておく必要がある。制度の説明資料は、難しい用語が使われているが、日本語でもせめて分かりやすい言葉で作られていると良い。就職するタイミングなど、高齢者になる前から将来について意識を高めていくと良い。日本には、高齢者になっても安心できる制度がある。もっと情報を流して、若いうちから外国人にも制度を知ってもらうようにする方がいい。

アデライデ委員：2年程前からデイサービスで働いているが、その間に会った外国人は一人しかいない。

かつてブラジルに移住した日本人は、高齢者になってもポルトガル語が分からずにブラジルで困っていた。

高齢者になったら家族が助けてくれると思うが、その家族に新しい家族ができたり、忙しくなったりすると、結局助けてもらうのは難しくなる。

妹尾委員：介護を受ける高齢者の通訳と、介護をする子ども等への通訳や情報が必要だと思う。介護サービス提供者が外国人で、介護サービス利用者との会話を外国語で行うのが理想ではあるが、それが難しい場合は、介護サービス利用者とケアマネジャーの打合せの時に、スポット的に通訳を利用できると良いと思う。その際に今後利用するサービスを説明してもらえば、介護サービス利用者も安心できると思う。

杉野委員：市役所などの窓口で、やさしい日本語で書かれた制度の資料があれば、市役所に通訳を連れて行かずに済むことも多い。

介護の話はデリケートな話と思われて、オープンな話題にならない傾向があるが、介護のことや老後について考えるセミナーなどがあると良い。

フォン委員：自分の親はインドシナ難民として55歳の時に日本に来て、今はベトナムに住んでいるが、年金をもらうことができなくて困っている。もし永住者の在留資格だったら年金もらうことができたと思うが、親は定住者だったので年金はもらえなかった。そのことを知っていればと思う。パンフレットなど、制度の情報をいろいろな場所で手に入れられると良い。今日本に来るベトナム人は、若い時から就職しており、健康保険や年金も支払っているのだから、このようなことは起きないと思う。

丹野委員長：今はビザの更新に、年金の加入状況が関係するが、以前はそうではなかった。来日するときに健康保険や年金に加入することを周知しておくことが大切。

今は年金協定があり、協定を結んでいる国との間では、日本で払った年金をその国で受け取ることや、その国で積み立てていた年金を日本で積み立てていたこととして加算できるようになっている。今は外国で年金を払っていても、つながるようになっているので、そのことについての周知が必要。

孫委員：介護認定の介護度によって介護保険サービスの自己負担額が変わる。どのようにしたら介護保険サービスを受けられるのか分かるようにする必要がある。

シム委員：私は、いつ韓国に帰るか分からないので韓国でも日本でも年金を払っているが、年金はいらないうって年金に加入しない人もいると思う。

市や国が、一人暮らしの高齢者のために、お金を支援するようなことを行っているか？

丹野委員長：今の日本の法律だと、一人暮らしで高齢者だからという理由だけで、国が支援することは無いと思う。昔、外国人で健康保険に入る人が非常に少なかった時に、病院がどうにかして病気の外国人を手助けするために使った法律がある。それは、「行旅病人及行旅死亡人取扱

法」と言って、明治時代の初期のころ、お伊勢参りの途中で行倒れをした人を助けるための法律。90年代に外国人が多く来日するようになったときも、この法律を使って、病気になった外国人を支援していた。今は、国は在留カードを確認することで、その人の在留資格や住所や就職先が分かる。その情報からその人が受けられる権利を確認して、支援を行っているような状況。それを超える支援としては、横浜の港町診療所が外国人の診療を行っている。港町診療所は、造船・港湾労働者の診療をしているが、そうした労働者に外国人が多いことから、外国人同士の保険組合を作った。月3,500円を350~500人の組合員が負担することにより、方が一病気や怪我をしても、病院でかかる本人負担額を安くすることができる仕組み。そういったものを浜松でも作れるのかという話になる。港町診療所の保険組合は、病院が中核組織となって調整を行い、ようやくできたもの。市や外国人支援をする人たちは、そういう意識の高い団体や人を見つけて育てていくことが大切。

杉野委員：もしそういった仕組みがあっても、分かりやすい情報や資料がないと使われずに終わってしまうと思う。

レニ委員：浜松市は外国人市民が多いので、もしそういった仕組みがあればありがたいのではないかなと思う。

事務局（鈴木）：社会保障は外国人・日本人に関わらずトータルで考えられるべきこと。非常に重いテーマではあるが、審議会で議論してだけでなく、他の地域での仕組みも勉強していくべきだと感じた。

事務局（松井）：外国人に限らず、日本人でも一人暮らし高齢者は、いつか誰かの助けがないと生活できなくなる時が来る。その時、知人や友人、親戚、地域の民生委員、福祉サービス事業所などいろいろな人の手助けを得ながら、必要なサービスを受けていくことが必要になる。そのためには、どのサービスを自分が受けられるのかを情報共有していくことが大切。

事務局（鈴木）：スコットランドのグラスゴーでは、ブリティッシュカウンシルが、「BIG BIG SING」というみんなで歌を歌う取り組みを行っている。グラスゴーの市民は喫煙率が高く、肺の病気になる人が多いため、歌を歌うことで肺を健康にするという取り組み。また、取り組みを通じてコミュニティが形成されることで、男性の高齢者の社会的孤立を防ぐという狙いもある。こうした健康寿命を延ばすという取り組みが必要だと感じた。

丹野委員長：制度の説明資料のやさしい日本語化や多言語化は、今すぐ始めた方がよい。今後は、すでに高齢者になっている外国人への対応と、これから高齢者になる外国人への対応の二つに分けて考えていくとよい。

また、外国人自身がこうした議論を積極的にイニシアチブを取って行っていくのが理想。川崎市外国人市民代表者会議では、委員長も委員も外国人で、市長に提言を行っている。将来的には、浜松市外国人市民共生審議会の委員長も外国人が担うようにシフトしていくといい。

孫委員：高齢者の健康維持のための取り組みは大切だと思う。自治会や地域の団体の活動へ、外国人市民はあまり参加していないように感じる。外国人向けの健康維持のための団体があると良いと思う。市からそういった団体へ公共施設利用時の補助などがあれば良い。高齢者が健康維持することによって、医療費の抑制にもなるので良いと思う。

レニ委員：自治会の回覧板で回ってくる情報は、難しい言葉が入っていることが多い。やさしい日本語で書かれた情報があると良い。

自分の子どもが生まれた時は、市から家庭訪問があった。それと同じように、高齢者も区切りの年齢の時に訪問が行われるように見回り役があると良いと思った。

鈴木委員：これから外国人高齢者が増える。制度の説明資料をやさしい日本語で書くなど分かりやすくする必要もあるが、相談センターに通訳を配置し、正しい情報を言葉で説明してもらえるようにすると良い。そのためには、通訳者を育てていく必要がある。

アelaide委員：外国人でも日本人でも高齢者になると問題は出てくる。今は高齢者ではない人も、いつかは高齢者になる。自分や家族だけでなく地域全体でこれからのことを考えていく必要がある。

丹野委員長：今話し合った内容は、日本人でも起こることだと思う。日本人の非正規雇用の方は、医療保険や年金に入っていない人も多い。だからこそ、医療保険や年金に未加入の人への対応をどうするのかというのは日本人、外国人に関わらず大きな問題であるので、意識して取り組んでいった方がいい。

事務局（松井）：外国人が浜松で暮らすための生活情報をまとめた「カナル・ハママツ」というWebサイトがある。そこには年金や介護などのことも記載している。7言語対応しているので、周りの方にもぜひ紹介して欲しい。

5 事務局からの連絡事項

6 閉会